

# 厳原北小学校での平和集会・対馬高校訪問

花田 早希

## 1. はじめに

本報告書では、対馬アクションリサーチ合宿の3日目（8月9日）の活動について記す。この日は、午前中に厳原北小学校で行われる平和集会に参加し、午後は対馬高校を訪問した。この2つについてそれぞれまとめる。

## 2. 厳原北小学校での平和集会

私たちが厳原北小を訪れたのは8月9日だった。この日は長崎に原爆が投下された日であることから、昭和46年度より、全校登校日として設定されており、各小中学校で「平和祈念式」、「平和集会」等を実施し、原爆犠牲者の慰霊と原爆被爆の実相の継承に務めている。

まず私たちは、5・6年の生徒と共に、長崎大学のナガサキ・ユース代表団 Peace Caravan 隊の3名の講話を聴いた（ナガサキ・ユース代表団…長崎県、長崎市、長崎大学の3者が構成する「核兵器廃絶長崎連絡協議会」が主催する人材育成プロジェクト）。核兵器と原爆という言葉の定義、核保有国の紹介、世界には現在どれほどの核兵器が存在しているのかなどの基礎的な説明や、日本・中国・韓国それぞれの国の大学生の核兵器に対する認識の違いの比較などの発表を聞かせていただいた。小学生も熱心に聞いており、最新の核兵器が対馬に投下された場合、その威力が対馬全体に及ぶことを聞いてとても驚いた様子を見せていた。その後は、全校生徒が集まり、6年生が修学旅行での平和学習についての発表を行った。原爆が投下された午前11時2分には、テレビを視聴しながら全員で黙祷をした。

平和集会に参加するのは初めての経験であったが、改めて原爆について、戦争の恐ろしさについて学ぶことができる貴重な機会であった。校長先生が、「平和集会は毎年行われているが、大人になった今でも新たに知ることや、忘れていたことの再確認ができる」とおっしゃっていたように、毎年平和集会が行われることによって、戦争を経験していない世代に、戦争の記憶を伝えていくことができるのだと感じた。長崎市内の子に比べ、対馬の子は原爆に対する感度が低いかもしれないが、長崎県民として8月9日には戦争を振り返り、自分たちがどうあるべきなのかを再確認する日として活動してほしいという思いがあるとおっしゃっていた。私は東京に住んでいるから、小中学生の頃に平和集会が行われていなかったから、ということを使い訳に、原爆について知らないというわけにはいかないのだと思った。戦争経験者がいなくなるこれから先の時代、平和な世の中を築いていく為の努力をしていく必要があるのは私たちなのだと感じた。

## 3. 対馬高校訪問

### ・国際文化交流コース

対馬高校は普通科、商業科に加え、全国の公立高校で唯一、韓国語・韓国文化を専門的に学べる「国際文化交流コース」がある。島内・県内のみならず、関東や沖縄からも意欲を持った生徒

が集まっている。韓国語授業のプログラムは、韓国から韓国人講師を招いて、最低1日1時間、2、3年生になると週7時間ほど授業をしている。在学中に韓国語能力試験6級を取得し、卒業後は、韓国の大学等へ直接進学する生徒もいる。対馬は地理的に韓国に近いだけではなく、歴史的にも古くから日本と朝鮮半島との文化的・経済的交流の窓口としての役割を果たしてきた。国際交流コースは、その特色を生かし、日常として学びの場を提供している。県外からは、KPOPや韓国ドラマなど様々なことをきっかけに韓国に興味を持ち、国際交流コースを選んでくる生徒がいる。

#### ・ユネスコスクール部

対馬高校は平成27年に長崎県で初めてユネスコスクールへの加盟を承認され、対馬の地域性を活かした環境学習に取り組んでいる。（ユネスコスクール…1953年にユネスコ本部が、環境問題など地球規模の問題に対応できる若者を育てようと、その理念に基づいた教育を実践する学校の認定を開始した。世界で約1万校、国内で約千校が加盟している。）

長崎県にもユネスコスクールを作るべきと考える声があり、通常認定までに2、3年かかるそうだが、対馬高校はそれよりも早く認定されることができ、2015年に加盟した。昨年から総合的な学習の時間にESDの学習を取り入れ、本年度からはボランティア部と園芸部を統合し、新たな部活として「ユネスコスクール部」を立ち上げた。

ユネスコスクール部の大きな柱の一つである「国際理解」という理念に基づいて、5月には韓国の学生とのビーチクリーンアップ活動を行ったそう。韓国の学生と交流できるのは、国境に位置する対馬であるからこそできることであって、私たちが住む関東圏の高校では難しいと思った。イベント的に設定された1度きりの場というわけではなく、日常の中で海外の学生と同じテーマのもと、共に活動できる機会があることは素晴らしいと思った。

私たちはアクションリサーチ2日目（8月7日）に対馬高校のユネスコスクール部の方と共に、ウラボシシジミの保全活動と佐護のビオトープのいきもの調査を行った。生徒たちは自然との境界線がなく、虫に触ることや、ビオトープに裸足で入ることに抵抗感をみせず、とても積極的に参加していることが印象に残った。ユネスコスクール部の活動を通して、普段行かない地域へ行き、自然に触れ合う機会が増え、対馬の自然や生き物について改めて知ることができた。

#### 4. まとめ

今回のアクションリサーチでは、実際に対馬で生活する学生たちの様子を伺うことができた。その違いは、子どもの頃から慣れ親しんでいる対馬の自然・社会環境が大きく関係していると思った。「持続可能な社会に向けて」という意識を幼い頃から持っているわけではないが、ただ生活の一部として、自然とのふれあいや地域とのつながりがあることが当たり前で生活していることが極めて重要な役割を担っていると感じた。高校卒業後、進学や就職で島外へ行った後、「ふるさと」として地元を想うとき、幼少期のそのような体験が再びその地に戻る大きな動機付けになるのではないかなと思う。

#### 参考文献

阿部治〔編〕，2017，『ESD の地域創成力ー持続可能な社会づくり・人づくり 9 つの実践』，  
合同出版，pp. 28～46。

文部科学省，2013，「日本ユネスコ国内委員会」。

(はなだ・さき 立教大学社会学部現代文化学科 3 年 阿部治ゼミ)